第85回

全国スポーツ施設研究協議大会

報告書

令和7年6月12日（木）

開会式

［フォトギャラリー］

主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会
会長　**大東 和美**

主催者あいさつ

鹿児島県スポーツ施設協会
会長　**池畑 辰也**

祝辞

スポーツ庁参事官（地域振興担当）付
参事官補佐　**勝美 直光**

歓迎のことば

鹿児島県教育委員会
教育次長　**紺屋 宏昭**

主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会
会長　**大東 和美**

第85回全国スポーツ施設研究協議大会の開催に当たり、主催者として一言ごあいさつを申し上げます。

本日は、ご多用のところ全国から多くの皆様にご参加を頂き、誠にありがとうございます。併せて、ご参加の皆様には、日頃から全国各地における体育・スポーツ施設の環境整備や管理運営を通じて、わが国のスポーツの振興・推進にご尽力頂いておりますこと、この場をお借りして心から敬意と感謝を申し上げます。

令和4年4月からスタートした今後5年間のスポーツ施策の方向性を示す「第3期スポーツ基本計画」も、本年度で4年目を迎えています。この間、国民がスポーツを「する」「みる」「ささえる」ことを真に実現できる社会を目指し、様々な関係者との連携・協力の下、新たな3つの視点に基づき、重点的に取り組む具体的施策が打ち出されています。

それらの施策推進のための中心的基盤となるのが全国の体育・スポーツ施設であり、施設の整備・充実が重要課題であることは申し上げるまでもありません。

また、ここ数年、スポーツを経済・地域の活性化に資する貴重な地域資源と捉え、国内外のスポーツを取り巻く環境の変化を踏まえながら、各地域の魅力あるスポーツ資源の更なる活用促進や、新たなスポーツ資源の創出等に取り組むなど、スポーツによる経済・地域の活性化、スポーツの成長産業化を推進する動きも活発化しています。

このように、今後ますます、全国の体育・スポーツ施設が、わが国のスポーツの振興のみならず、地域活性化の核として重要な役割を担うことが求められているところです。

一方、地域の既存の体育・スポーツ施設においては、厳しい財政状況の下、安全・安心な施設づくりやユニバーサルデザイン化等への対応とともに、より効率的な管理運営が求められています。

このような状況の中、本研究協議大会は、全国の体育・スポーツ施設関係者、スポーツ行政関係者が一堂に会し、スポーツ施設等に関する最新情報を共有するとともに、研究協議、相互理解を通じて、より良いスポーツ施設のあり方について深く掘り下げることを目的として開催するものです。

ご参加の皆様には、本研究協議大会を通じて、スポーツ施設に関する諸課題についてご研鑽いただき、体育・スポーツ施設の整備・充実、安全・安心で持続可能な体育・スポーツ施設づくりに向けて、より一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、本研究協議大会を開催するに当たり、スポーツ庁をはじめ、鹿児島県教育委員会、鹿児島県スポーツ施設協会並びに関係各位のご協力に心から御礼を申し上げ、あいさつといたします。

主催者あいさつ

鹿児島県スポーツ施設協会
会長　**池畑 辰也**

第85回全国スポーツ施設研究協議大会の開催県協会を代表して、一言ごあいさつ申し上げます。

本日、公益財団法人日本スポーツ施設協会の大東和美会長をはじめ、各都道府県体育・スポーツ施設協会、特別会員など多くの皆様方のご参加を得て、ここ鹿児島の地で、本大会を盛大に開催できますことに心より感謝申し上げます。また、スポーツ庁参事官（地域振興担当）付の勝美直光参事官補佐、鹿児島県教育委員会の紺屋宏昭教育次長のお二方には、公務等大変ご多忙の中、来賓としてご出席賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

本大会は、開催趣旨の通り、多様な主体におけるスポーツの機会創出やスポーツによる地方創生、スポーツの成長産業化などをテーマに、特別講演や事例発表、施設視察等を行い、スポーツの持つ力を再認識するとともに、今後のわが国のさらなるスポーツの振興に寄与することを目的に開催するところです。本県スポーツ施設等にまつわる旬な話題・情報等をご提供できるものと、関係者一同自負しております。参加される皆様方には、明日までの2日間、大いに自己研鑽に励んでいただければと思います。

さて、本県は、桜島や屋久島、奄美群島などの雄大な自然、和牛日本一に輝いた鹿児島黒牛、昨年12月にユネスコ無形文化遺産に登録された伝統的酒造りによる焼酎や、荒茶生産量初の全国一位となった鹿児島茶など世界に誇れる食や優れた県産品のほか、歴史や文化など多くの宝物を有しております。参加される皆様方には、本大会を機に「南の宝箱 鹿児島」の魅力を存分にご堪能いただければと存じます。

最後になりますが、本大会が皆様にとって有意義な機会となることを期待いたしますとともに、日本スポーツ施設協会をはじめ、本大会の開催にご尽力いただきました関係機関、団体、そして本日ご参加の皆様方のご健勝を祈念いたしまして、開催県協会代表のあいさつといたします。

2日間どうぞよろしくお願いいたします。

祝　辞

スポーツ庁参事官（地域振興担当）付
参事官補佐　**勝美 直光**

本日は、第85回全国スポーツ施設研究協議大会への出席の機会をいただきまして、誠にありがとうございます。また、関係者の皆様、特に公益財団法人日本スポーツ施設協会、また本日このような素晴らしい場所をご準備下さいました鹿児島県スポーツ施設協会の事務局の皆様には、心より御礼申し上げます。

私は、今年4月にスポーツ庁に着任いたしました。まだまだ現場の状況や課題について学んでいる段階ですが、本日、このように多くのご経験をお持ちの皆様のお話をお伺いできる機会をいただきまして、大変ありがたいと思っているところです。

スポーツ庁では、「第3期スポーツ基本計画」の目標のひとつに、地域において誰もが気軽にスポーツに親しめる「場」づくりを掲げております。その実現には、スポーツ施設の整備、老朽化対策、安全の確保はもちろんのこと、スポーツが地域振興にもたらす様々な効果を十分に発揮させながら、「量」的・「質」的にスポーツ施設の魅力を高めていくことが重要になってくると考えているところです。

今後とも、皆様の新しい取組を応援しながら、また、皆様の様々な創意工夫ある取組を我々も勉強させていただきながら、より良いスポーツ環境の創出に努めてまいりたいと思っておりますので、一層のご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、全国スポーツ施設研究協議大会の一層のご発展と、本日お集まりの皆様方のご健勝を心よりお祈り申し上げまして、本日の祝辞とさせていただきます。

ありがとうございました。

歓迎のことば

鹿児島県教育委員会
教育次長　**紺屋 宏昭**

当県教育長の地頭所 恵がご挨拶申し上げる予定でしたが、公務のため、私から代読いたします。

本日、全国各地から皆様をお迎えして、ここ鹿児島の地で、第85回全国スポーツ施設研究協議大会が開催されますことをお祝い申し上げますとともに、心から歓迎いたします。

また、ご参加の皆様におかれましては、日頃からスポーツ施設の環境整備や管理運営など、スポーツ振興に多大なるご尽力をいただいておりますことに対し、深く敬意を表します。

さて、わが国では社会の課題として人口減少・高齢化等の人口構造の変化が進んだこともあり、これらは、スポーツに参画する者の減少やそれを支える担い手の不足、学校部活動や地域におけるスポーツ・運動環境の維持・困難さにつながっております。このため、あらゆる世代のスポーツ機会の確保が急務であり、スポーツを活用した健康増進や地方創生の取組にも大きな期待が寄せられています。

本県が令和5年に実施した生涯スポーツの振興のための調査では、週1回以上運動した方やこの1年でスポーツを観戦した方、スポーツに関するボランティア活動を行った方の割合が、前回調査時より向上しており、今後もスポーツを「する」「みる」「ささえる」など、多様化する県民のニーズに応えられるよう、環境づくりに取り組み、さらなるスポーツの振興を図っていきたいと考えております。

こうした中、全国のスポーツ施設関係者が一堂に会し、スポーツ施設のあり方等について研究協議を行い、理解を深める大会が本県で開催されることは、大変有意義なことであり、本日ご参加の皆様におかれましては、活発な交流や情報交換を行っていただき、本大会を実り多いものとしていただくことをご期待申し上げます。

結びに、本大会の開催にご尽力いただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、本大会のご成功を祈念申し上げまして、歓迎のことばといたします。

第８回
スポーツファシリティーズ大賞表彰

［フォトギャラリー］

スポーツ庁長官賞
施設計画部門

SAGA サンライズパーク
（SAGA アリーナ・SAGA アクア・SAGA スタジアム）
佐賀県／梓設計・石橋建築事務所・
三原建築設計事務所共同企業体

公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞
施設計画部門

彦根総合スポーツ公園陸上競技場
（平和堂 HATO スタジアム）
株式会社佐藤総合計画 関西オフィス

公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞
施設計画部門

きたぎんボールパーク（いわて盛岡ボールパーク）
盛岡南ボールパーク株式会社

公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞
管理・運営部門

新潟市亀田総合体育館
公益財団法人新潟市開発公社

令和７年度

スポーツ施設功労者表彰

［フォトギャラリー］

▽表彰状受賞者

加盟団体	48 名
特別会員	17 名
特別会員部会部会長推薦会社	5 社

▽感謝状受賞者

加盟団体役員	2 名
加盟団体事務担当者	3 名
特別会員部会部会長推薦	2 名
長期継続特別会員	5 社

表彰状受賞者代表

鹿児島県　株式会社セイカスポーツセンター　**草野 和也**

表彰状受賞者代表

美津濃株式会社　**福島 浩樹**

感謝状受賞者代表

前田道路株式会社　**前川 洋介**

感謝状受賞者代表

山一体育施設株式会社　**松下 守正**

代表者謝辞

鹿児島県　特定非営利活動法人ヨロン SC　**柳田 孝志**

特別講演

スポーツから学んだこと

2016 リオデジャネイロ五輪ラグビーフットボール競技
日本代表主将
女子７人制ラグビーチーム「ナナイロプリズム福岡」
ヘッドコーチ
株式会社 Sports for LIFE 代表取締役
桑水流 裕策

自己紹介

私は1985年に鹿児島市で生まれ、今年で40歳になる。鹿児島工業高校卒業後、福岡大学に進学して、2008年に当時のコカ・コーラウエスト（株）に入社した。リオデジャネイロ五輪が終わった17年にプロ契約し、21年に現役を引退するまで同社でプロ選手としてプレーした。22年に鹿児島に戻って23年には一時的に現役復帰し、かごしま特別国体にも出場した。現在は会社を設立してスポーツ事業を広める一方、福岡県久留米市に拠点を構える女子ラグビーチーム「ナナイロプリズム福岡」でヘッドコーチを務めている。

大学2年生のときに7人制ラグビー日本代表に初選出され、その後、アジア大会と15人制ラグビーの代表にも選ばれた。競技歴一番のハイライトは、16年リオ五輪にキャプテンとして出場し、4位入賞したことだ。

ラグビーについて

ラグビーは、大きく15人制と7人制に分けられる。15人制ラグビーで4年に1度開催されるワールドカップ（W杯）は、オリンピック、サッカーW杯に次ぐ世界3大スポーツイベントといわれ、世界中から注目される大会である。2019年にアジア初開催となった日本大会は、皆さんも記憶に新しいのではないかと思う。そして一昨年にフランス大会が開催され、今後は27年のオーストラリア大会、31年のアメリカ大会と続く。

15人制ラグビーは、何といってもフィジカル勝負になる。密集戦になるし、人数が多いのでチームの戦術や戦略が勝敗を大きく左右する。ただ、ボールがどこにあるのか、何が反則だったのか分からないと感じる人も多く、初心者には難しいかもしれない。

対して7人制ラグビーは、通称・セブンズとも呼ばれ、7人と7人で対戦する。それ以外のルールやグラウンドの広さは15人制と同じである。時間は15人制が40分ハーフであるのに対し、7人制は7分ハーフになる。大会のスケジュールも15人制は1週間に1試合に対し、7人制は2日間で6試合がベースになっている。

セブンズで非常に大きな要素を占める体調管理について紹介する。セブンズは1日で2～3試合行うため、試合間のリカバリーが重要なポイントとなる。リオ五輪では、1日目は12時30分開始の試合の4時間半後に次の試合をするスケジュールだった。この間にストレッチし、アイスバスに入って栄養を取り、さらに短い睡眠を取って積極的に身体を休ませて次

の試合に備えることが非常に重要である。

セブンズはグラウンドが広い分、ボールと人が常に動いており、ラグビー初心者でもわかりやすいのではないかと思う。28年のロサンゼルス五輪には男女セブンズ代表が出場してくれると思うので、ぜひ応援していただきたい。

スタジアムのご紹介

遠征を通して、これまで世界23か国を転戦する機会に恵まれた。世界各国のいろいろなスタジアムでプレーした中で、印象に残っている3つのスタジアムを紹介する。

▽トゥイッケナム・スタジアム（イングランド）

イングランドのロンドン南西部にある、収容人数8万2,000人を誇る世界最大のラグビー専用スタジアム。1909年にできた非常に歴史あるスタジアムで、ラグビー発祥の国の誇りを感じさせてくれる。最寄駅のトゥイッケナム駅から住宅街を歩いて20分ほどかかるが、その道中が非常に楽しく、屋台が並ぶ日本の夏祭りのような雰囲気を楽しみながら、ボルテージが最高潮に到達したときにスタジアムに到着する。この道中も含めて魅力だと感じる。

▽サム・ボイド・スタジアム（アメリカ）

アメリカのネバダ州ラスベガスにある1971年に開場したスタジアムで、ネバダ大学ラスベガス校のフットボールチームの本拠地として長年使用されてきた。収容人数は4万人で砂漠の中にあり、夕暮れになるとスタジアムの奥に夕日が沈んで本当に魅力的なスタジアムである。2012年に試合をしたときに、頭を強く打って「バーナー症候群」といわれる手がしびれる症状が出てしまったが、スタジアム内のメディカルルームにはX線の装置があり、その場でレントゲンを撮ることができた。大学施設であるにもかかわらず充実した環境が整っており、衝撃を受けたことを覚えている。

▽デオドロ競技場（ブラジル）

リオ五輪の7人制ラグビー会場として使用された。収容人数1万5,000人のコンパクトなスタジアムだからこそ感じられる、選手と観客の一体感ある雰囲気と南米特有のにぎやかな空気感が、リオの思い出を彩っている。

ラグビーとの出会い

ラグビーを始めたのは、父親がラグビー好きで身近にあったということもあるが、直接のきっかけは、中学校のサッカー部のコーチに「高校に入ったらラグビーをしないか」と言われたことだった。

高校のラグビー部は上下関係がきちんとしており、先輩からいろいろと教えてもらった。3年間しっかりラグビーと向き合えたことで、目標だった全国大会（花園）にも3年生のときに1度だけ行くことができた。本当に人として成長できた3年間だった。

この3年間で鍵とした言葉が「禍福は糾える縄の如し」だった。自分で立てた目標を目指していく中で、この言葉通りだという思いを何度も経験した。ラグビーは大好きだし、夢の花園にも絶対に行きたいけど、そのためには嫌なことや苦しいことに耐えなくてはいけない。苦しいことに耐えれば、同じくらい幸せなことや楽しいことが待っている。その幅が大きいほど、結果は大きくなるのではないかと思う。この高校3年間の経験は、間違いなく私の人生の土台となっている。

大学では、本当にいろいろな出会いに恵まれた。先生やコーチ、先輩、そして素敵な言葉とも出会った。7人制ラグビーの日本代表に選んでいただけたのは、日本代表のヘッドコーチを務めていた大学時代のコーチの話がきっかけだった。

ある日、練習後の円陣でコーチから、貧血のある女子柔道家が食事を改善して鉄の錠剤を飲み出したら、一気に体力が付いて成績も上がり、オリンピッ

クに出場するほどの選手になったという話を聞いた。貧血だった私も鉄の錠剤を飲み出したところ、今まできつかった走り込みの練習でうそのように走れるようになり、チームの中でも体力が上位に入るようになった。

その1年後、コーチが私を日本代表に推薦してくれた。たった1日の、いつもの練習後の何気ないコーチの話が私を本当に大きく変えてくれたのである。目標を叶えたいと常に考えていると、叶えるための情報が入ってくるようになる。目標を持って行動し続けていると、きっかけやチャンスが寄ってきて、つかみやすくなる。大学時代、アンテナを張って行動し続けた結果、日本代表になってオリンピックに出場することができた。

就職を決める時期になると、たくさんのチームからオファーをいただき、どのチームに入るか悩んだ挙げ句、コカ・コーラに入社した。その決断の後押しをしてくれた言葉が、「一冊の哲学書より、一滴の香水」であった。これは当時、大学の機関誌で学長が言っていた言葉で、進路に迷っているときにこの言葉と出会い、周りの意見や考えよりも、自分の考えを大事にしたほうが良いと言っているのだと受け取った。今でも悩んだときには、最後は自分の感覚を大切にするようにしている。

スポーツから学んだこと

ラグビーは矛盾のスポーツといわれている。前にパスをしてはいけないが、トライして得点するためにはボールを前に進めなければいけない。現役時代、常に「大きくなれ」と言われ続け、同時に「大きくなってもスピードや体力は落とすな」と言われてきた。体重別ではないので、60kgの選手が100kgの選手にタックルしなければいけない。そんな矛盾だらけのスポーツで、常に身体を張ってボールを守り、仲間からの信頼を勝ち取っていく自分が試されるところがラグビーの魅力だと思う。

7人制ラグビー日本代表のオリンピックでの目標はメダル獲得だった。メダルを目指す中でコーチがいつも言っていたのは、101％頑張ろうということだった。当時の日本代表の世界ランキングは11位で、リオ五輪に出場した12カ国の中で、開催国のブラジルを除くと最下位だった。そんなチームがオリンピックでメダルを目指すのだから100％頑張るのは当たり前、そこにプラス1％加えて毎日頑張ろうと言い続け、私たちは101％の努力を毎日毎日続けた。その結果、メダルには一歩及ばなかったが4位に入ることができたのである。

スポーツを通して「禍福は糾える縄の如し」の言葉通り、大変な思いやきつい思いをした後には必ず良いことが待っていると信じ、「1％の努力」をし続ければ、きっかけをつかみ、目標に近づけるということを学んだ。

今後について

2021年5月に現役を引退し、引退を決めた同じ週に東京五輪の聖火ランナーを務めた。沿道から手を振って応援してくれる人の笑顔や、子どもたちの聖火を見るきらきらしたまなざし、コロナ禍で病院の敷地内から手を振ってくれる医療従事者の人々。オリンピックを心待ちにしていた気持ちが伝わってきて、スポーツの持つ力に感動するとともに、現役引退に至るまでの出来事を思い返し、スポーツの存在意義を再認識することができた。

私は今、会社を設立してスポーツの魅力や可能性を全ての世代に伝える事業を展開している。興味があれば「スポーツテイスティング」という言葉で検索していただけると幸いである。

事例発表Ⅰ

スポーツ・コンベンションセンターの整備について

鹿児島県観光・文化スポーツ部
スポーツ・コンベンションセンター整備課 主査
満園 侑紀

整備・検討の背景

現在、鹿児島県の体育館は、バスケットボールコート2面、観客席約1,700席の県総合体育センター体育館がある。築後60年以上が経過して老朽化が進み、県大会等では複数会場での分散開催や夜間に及ぶ大会運営を余儀なくされ、全国・国際大会の誘致に支障をきたしている。また本県は地理的な特性もあり、離島や遠方から参加した選手が交通手段の制約から表彰式の途中退席や1泊余計に宿泊するなど、体力的・経済的に大きな負担となっている。

このような課題を踏まえ、十数年間にわたり県政の重要課題として検討してきたが、さまざまな意見があり、整備に至っていないのが現状である。このような中、令和2年10月に県内外の各分野の専門家で構成する「総合体育館基本構想検討委員会」を設置し、令和4年3月に「スポーツ・コンベンションセンター基本構想」を策定した。

施設のコンセプト

施設のコンセプトを検討するにあたり、まず需要予測調査を行った結果、当施設はアマチュアスポーツによる利用が約7割、コンベンションやコンサート等にプロスポーツを加えた利用が約3割と想定された。この結果も踏まえ、スポーツ振興の拠点機能に加え、多目的利用による交流拠点機能を備えた施設とすることとした。

スポーツ振興の拠点機能については、屋内スポーツ競技の中核的な施設（聖地）で全国・国際大会の誘致が可能な「する」スポーツと、一流のスポーツイベントなど「みる」スポーツにも対応できる施設、さらに、スポーツ科学の研究・提供機能、スポーツ情報発信機能、スポーツ関係者の交流・ネットワーク拠点機能など、本県のスポーツ振興を「ささえる」人材を育成する施設とする。このことにより、競技力の向上や競技人口の増加を図り、県民、とりわけ将来を担う鹿児島の子どもたちに良質なスポーツ環境を提供する。

こうしたスポーツ振興の拠点機能を軸としつつ、コンサート・イベント等を開催し、さまざまな人々が交流できる施設とすることで賑わいを生み出し、地域活性化を図るとともに施設の収益性を高めたいと考えている。

施設の規模は、各種競技の大会基準等を基に必要最小限の規模を設定した。競技フロアはバスケットボールコートでメインアリーナ4面、サブアリーナ2面の計6面とするほか、武道場は柔剣道場各2面の計4面、弓道場は近的12人立・遠的6人立の規模を想定している。

観客席は、メインアリーナは「みる」スポーツに対応できる施設として、県民が一流のアスリートに間近に触れる機会を創出するため、できるだけ多くの競技の国際大会が可能な8,000席程度。その他、サブアリーナ500席程度、武道場400席程度、弓道場は近的・遠的各150席程度。器具庫や更衣室、会議室等の諸室も加え、延床面積は3万㎡程度を想定している。

整備予定地の選定過程

施設の機能や規模のコンセプトを検討した上で、その機能を最大限に発揮させる観点で立地条件を検討した。

本県には43の市町村があり、薩摩半島と大隅半島の2つの半島と多くの離島を有するため、県土全域からの交通利便性、宿泊施設・商業施設の集積状況などを踏まえると、鹿児島市に立地することが望ましいとされた。

市内において、当施設の建設が可能なおおむね1万5,000㎡以上の土地を対象に調査を実施し、5箇所の整備候補地を選定。12の客観的な評価基準を設定し、評価・検討した結果、「ドルフィンポート跡地」を一体的なエリアとして選定した。

土地利用・配置計画（イメージ）

「ドルフィンポート跡地」は、鹿児島港の本港区に位置しており、近隣には大隅半島へ行く桜島フェリーの乗り場や種子島・屋久島に行く高速船の乗り場があり、鹿児島の海の玄関口とも呼ばれている場所である。

また、九州新幹線や空港リムジンバス等が発着し、鹿児島の陸の玄関口といわれる鹿児島中央駅から約2kmの場所にあり、市電やバスが多数発着する中心市街地の天文館からも徒歩圏内であり、県内各地はもとより県外からもアクセスしやすい、交通利便性に優れた環境にある。

施設の北側には、フリーマーケットなどのイベントやコンサート等の際には臨時駐車場として活用できる多目的広場を設置する。多目的広場については、目の前にある「ウォーターフロントパーク」と呼ばれる緑地帯とも連携した活用も期待されている。

整備にあたっての主な配慮事項

▽景観

整備予定地の本港区エリアは、薩摩半島と大隅半島の間にある錦江湾や桜島の良好な景観を有することから、整備にあたっては景観に配慮しながら本港区にふさわしいデザインを備えた鹿児島のシンボル的施設とする。

市の景観条例に基づく景観計画に沿い、城山展望台からの桜島の眺望を確保するため、建物の高さ制限を遵守して検討を進める。ドルフィンポート跡地は市街地側の高さ制限が60ｍ、海側が45ｍとなり、当施設の高さは25～30ｍ程度を想定している。

また、市街地からの桜島の眺望や海から見た景観にも留意することとしており、本県では本港区エリア一帯における景観デザインについて、外部の専門家で構成する「鹿児島港本港区エリア景観デザイン調整会議」を設置し、パブリックコメントや県議会での論議等を経て、桜島の眺望やまちなみ景観など、景観形成の基本的な方向性を示すガイドラインを令和5年12月に策定している。ガイドラインに則り、本港区エリアの良好な景観形成と魅力向上に努めることとしており、当施設の整備にあたっても、ガイドラインに沿って景観や眺望に配慮する。

▽開かれた施設としての整備

近年、国等において、アリーナはまちとの連続性を確保することや、施設の外でも賑わいを創出することが望ましいとされている。当施設においても、

中心市街地との連続性を確保するとともに、さまざまな人々が利用できる公共空間を施設内外に整備することを検討する。

多目的広場やアプローチ空間、エントランスや展望スペースを設け、カフェやイベント等にも利用可能な交流スペースを設けることにより、スポーツ大会等の施設利用者のみならず、県民や観光客が気軽に立ち寄り、回遊できる開かれた施設としての整備を検討する。

▽中心市街地との回遊性・融和性

本港区エリアは中心市街地と近接しているので、その賑わいを波及させて地域全体が発展するよう取り組む必要がある。

回遊性を高めるための取組として、歩道など来場者の動線の確保や案内表示の充実、連携したイベント開催などのソフト対策などを今後検討する。また附帯施設等における民間活力の導入を検討する場合には、本港区エリアの立地を踏まえた中心市街地との回遊性・融和性に十分留意する。

▽県民に愛され誇りとなる施設

当施設は県民にとって屋内競技の中核をなし、子どもや青少年だけでなく、高齢者などあらゆる世代、また障害者や県内各地の県民がスポーツに親しむとともに、アスリートにとってここから全国・世界に羽ばたいていくシンボル的な施設として、整備に向けて取り組む。

加えて、コンサート、イベント等を通じて県内外からの来訪者で賑わい、感動を与える施設として、さらに施設利用者だけでなく、県民や観光客が気軽に立ち寄れる開かれた施設として、中心市街地との回遊性を高め、大きな経済波及効果をもたらす施設として、永年にわたり県民に親しまれ、誇りとなる施設となるよう着実に取組を進める。

▽ユニバーサルデザイン

障害者や高齢者を含む全ての人々が安全で利用しやすい施設を目指す。今後、基本設計・実施設計の段階において先進事例の対応状況も踏まえつつ、関係者等からの意見も伺いながら、積極的に検討する。

▽快適性

観客、競技者、大会運営者、それぞれの立場における快適性に配慮する。

観客の立場では、フロアが見やすい観客席の整備や最先端の情報ネットワーク環境・映像・音響の導入、イベント時の滞留空間だけでなく飲食等にも対応できるエントランス・ホワイエ等の整備について検討する。ホスピタリティの観点からは、飲食にも対応したVIP室・VIPラウンジの整備も検討する。

競技者の立場では、各競技の実施に適した照明・空調の整備や更衣室の質の確保、円滑な大会運営に資する関係者動線等の整備について検討する。

大会運営者の立場では、搬入搬出時の出入口・搬入スペースの確保やトラックでの直接搬入、電源設備等の充実、メディアやVIP対応等の関係者諸室の充実等について検討する。

まとめ

令和6年4月にPFI方式で事業者を募集したが、社会情勢の変化から建設コストの大きな増加があり、同年9月に入札不調となった。本県としては、1年あたりの負担額を抑えられる従来型手法に見直した上で、県大会が開催できる必要最小限の規模で当施設の整備を推進していく。供用開始時期は、現時点での想定で令和14年度末ごろになると考えている。

当施設のこれまでの検討経緯については、本県のホームページに関係資料を公表しているので、ご確認いただきたい。

事例発表Ⅱ

「薩摩おいどんリーグ」が目指すもの

株式会社ぶるぺん 代表取締役
薩摩おいどんリーグ実行委員会 委員長
小薗 健一

はじめに

薩摩おいどんリーグは、鹿児島県でキャンプを実施する大学、社会人、プロが参加する野球の交流戦で、3年前に薩摩おいどんカップとしてスタートした。

施設を使ったイベントにはお金がかかる。我々は入場料や参加チームの参加料を無料にして、協賛金だけで運営している。今年は16日間で100試合開催し、2,500万円ほど経費がかかったが、それを協賛金だけで賄わなければならない。

協賛企業が何を期待しているのか。弁当屋の私は、平成元年から高校野球の監督を務めているが、今までそんなことは考えたこともなかった。この3年間、期待にどう応えればよいのかという迷いがあった。

現在どのような方向で動こうとしているのか。「薩摩おいどんリーグが目指すもの」というタイトルで濃い話をしていきたい。

第3回開催報告

薩摩おいどんリーグは、同リーグ実行委員会が主催している。私が実行委員長で、副委員長と監事に鹿児島県観光・文化スポーツ部長と次長、鹿児島の民放4局に加えて、メインスポンサーである鹿児島銀行傘下の九州経済研究所から1名というメンバーで構成されている。

いろいろな人と幅広く一緒にやろうと、県内各地の市長にも声を掛けたところ、「うちの球場を使って一緒にやろう」と言って下さった。鹿児島の野球人口は減っているが、やはり野球というのは日本の一時代を支えてきた文化であり、小さい子どもたちに何かすごいものを見せたいということで、今年は8つの市に参加いただき開催できた。

成功の原動力は、非常にいい関係ができていることで、各市が一生懸命参加して下さり、県スポーツ振興課が我々に寄り添って一緒に歩んで下さっている。

今年2月22日～3月9日に開催した第3回は、後援が鹿児島県と鹿児島市、薩摩川内市、姶良市、鹿屋市、枕崎市、指宿市、阿久根市、出水市の8市。交流戦の日程は16日間で、会場数は8市10会場。予定試合数は117試合（実施は100試合）で、2年目の昨年は92試合、スタートした一昨年は83試合。参加チームは54チームで、昨年は42チーム、一昨年は37チームであった。

参加チームは、社会人も大学も日本一を争うチームが集まってくれた。そのうち3分の2程度は試合だけ、またはオープン戦参加、残りの3分の1程度はキャンプを張って参加している。

プロ野球では、福岡ソフトバンクホークスの3軍が3年連続参加のほか、韓国プロ野球から2チーム、独立リーグの九州アジアリーグから1チームと、プロのカテゴリーで4チームが参加、大学と社会人、大学とプロが対戦する交流戦を組んでいる。

総観客数は2万4,000人、スタートの年も2万人ほど集まった。54チームの選手・スタッフ数は今年が最高で2,574人。我々が計算しただけでも総宿泊数が1万8,761泊なので、実際には1万9,000～2万泊だったと思う。入場料無料・参加料無料で運営しているが、参加にあたって守ってほしいとお願いしているのは、必ず鹿児島県内で宿泊することである。

また、ピックアップゲームを設定し、各市で1回ずつ8回行った。近くの高校の吹奏楽部やチアリーディング部が賑わいを演出したり、キッチンカーを並べたり、始球式を行ったり、グローブの修理や試合後に子どもたちの野球教室を開くなど、さまざまなイベントを開催する。

ライブ配信結果

ライブ配信は、KKB鹿児島放送、KTS鹿児島テレビ、鹿屋体育大学野球部、そして実行委員会が地元企業にお願いしており、ピックアップゲームを含む合計約20試合が配信された。今年は朝日新聞運動部と連携し、我々のホームページだけでなく朝日新聞からも全国中継された。

また、「一球速報.com」というほぼ全てのアマチュア野球の試合速報を1球ごとに配信するサイトがあるのだが、今年からリーグ全試合の速報が配信されるようになった。クリック数は16日間でおよそ455万回、相当数の人が観てくれる状況になってきた。

人気があるのは、慶應義塾大学、立教大学、中央大学や、トヨタ自動車、NTT西日本の試合。やはり人気があるチームはそれぞれのサイトのフォロワーも多く、視聴者は1試合で1万人を超える。また、韓国プロ野球チームの試合を中継すると、常に7,000～8,000人が視聴していることにも驚いた。

野球普及活動

▽野球教室等

子どもたちに野球の素晴らしさを知ってもらうため、各地で野球教室を開催している。パナソニックが講師を務めた親子野球教室は、お母さんにもグラウンドの雰囲気を経験してもらった。立教大学は、阿久根市の球場で1カ月キャンプを張ったことから、野球教室を通じて小・中学生と大学生の親交が非常に深まり、指導者の交流も進んだ。

また、グローブメーカーの久保田スラッガーによるグローブの手入れの講習や、ゼットは親子グローブ作り体験教室を2年連続で開催した。

▽指導者向け講習会等

仕事が終わった後、夕方に指導者たちがやってきて、中・高校生相手に真剣に野球を教える姿を指導者が学ぶというもの。自分が高校の監督を務めていることもあり、初年度から実施している。また、鹿児島県理学療法士協会では、去年から医師とともに高校生ピッチャーの肩や肘を無料で検査している。

特筆すべきはトヨタ自動車の講演会。初年度参加した年に日本一に輝き、翌年はそのご褒美としてアメリカでキャンプを張ったため、鹿児島には来られなかった。しかし今年は「アメリカで学んだものをみんなに伝えたい」ということで、講演会とパネルディスカッションを開いてくれたのである。

さらに「おいどん留学」と題し、県内の小・中学生を対象に、JAL日本航空鹿児島支店、トヨタカローラ鹿児島とKYT鹿児島読売テレビの協賛により、同行者を含む総勢27名で神宮球場の早慶戦を観戦した。3万人ほどの超満員の神宮球場で試合を観て、子どもたちが受けた感銘はすごいものだった。

▽中学生ベンチ体験

ヘルメットをかぶって安全にも配慮し、チェンジのときなどは一緒になって円陣を組んだりしながら、ベンチの雰囲気を中学生に味わってもらっている。

実行委員長として

私がなぜこのようなことをしているかというと、弁当屋の私が薩摩おいどんリーグをスタートさせたのは、三十数年来のお付き合いになるが、亜細亜大学元監督の生田監督の影響である。

亜細亜大学が鹿児島でキャンプを張ることになり10年ほどたったが、その間3回ほど日本一になったことから、同大学の選手が欲しくてトヨタ自動車やENEOSなど社会人チームも鹿児島に来るようになった。

私もこの10年間で非常に鍛えられた。たどり着いたのが、現場でうどんやカレー、ラーメンなど温かい食事を提供することだった。キャンプ期間の2・3月は寒いので、選手がすごく喜ぶのである。いろいろと学習して信頼されるようになると、今度は食事以外のことまで頼まれるようになり、様々なチームとの付き合いが深まっていった。

そして5年前、各チームの人たちから「ゲームだけでもみんなを鹿児島に呼ぼう」という話があり、鹿児島のためならやらなければいけないということで、頼まれて仕方なく実行委員長を務めることになった。

いろいろなことに気付き始めたのは2年目あたりから。参加チームに大満足で帰ってもらうためには、寝床や食事などの環境は絶対に大事だと思う。キャンプは長くて1カ月、短くても1週間ハードな練習をするので、いかに温泉が魅力的か、いかに宿が大事か。そんなことに鹿児島は正直慣れていなかった。

いまだに、ユニフォームを出すクリーニング屋が少ない、食事も弁当もハードな練習をするチームからすると困ることがある。本格的にトレーニングできるウエイトトレーニング場が少ない。そのあたりも満足してもらえるよう、県内に広げていかなければいけない。

野球が子どもに愛されるように

今年、早慶戦の観戦で実現した「おいどん留学」を来年もぜひ続けていきたい。社会人の都市対抗野球大会は企業野球の頂点で、全国から社会人たちが集まり、すごい応援を繰り広げる。これも一回見てみたい。それが鹿児島に何をもたらすか分からないが、スポーツが持つ情熱・熱量が、何か鹿児島に生かされることがあるかもしれない。

1年目から、我々の通信簿のように経済波及効果が出されている。1年目は6億3,000万円だった。2年目に入るときに、あるスポンサーの社長から「野球をするためだけにお金を出しているわけではない」といった内容の言葉を聞いた。もっと地域経済に波及する工夫をするようにという意味だと捉え、この社長の一言は非常に勉強になった。そして2年目の経済波及効果は7億3,000万円だった。

さらに今考えているのは、リーグの参加チームを離島に連れていくことだ。鹿児島県には多くの離島があり、相当数の高校生が野球をしているのだが、やはり野球人口は減っている。そこで、あまり使われなくなった球場に大学と社会人のチームを連れていって試合を見てもらうとか、地元の高校生と試合をしたり、野球教室を開いたりしたいと考えている。

県内の野球関係団体と手を取り合い、野球人口を増やすために一致団結した活動をこれまで3年行ってきた。やはり一番大事なのは、子どもたちに野球が愛されることであり、薩摩おいどんリーグはそのための一つのいいきっかけだったと思う。野球を愛する子どもたちが増え、野球がまちにあふれるような鹿児島をつくっていきたい。

閉会式

次回開催県あいさつ

佐賀県スポーツ施設協会
松尾 健

次回開催県を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。

本日、ここ鹿児島県におきまして、第85回全国スポーツ施設研究協議大会が盛大に開催されましたことをお喜び申し上げますとともに、この大会に参加させていただいたことに感謝申し上げます。また、大会準備にご尽力いただきました日本スポーツ施設協会、鹿児島県スポーツ施設協会、大会実行委員会など関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

本日は、特別講演をいただきました桑水流様から7人制ラグビーやスタジアム、スポーツから学んだことなど大変意義深いお話を伺うことができました。また事例発表では、鹿児島県の滿園様からスポーツ・コンベンションセンターの構想や整備イメージ、そして小薗様から薩摩おいどんリーグの先進的な取組など貴重なお話を伺うことができました。本日ご登壇いただいた皆さま方にも心から感謝申し上げたいと思います。明日は、鹿児島県のさまざまなスポーツ施設を見せていただくことになっており、この二日間で私共スポーツ施設に携わる者にとって有意義で充実した大会になると思っております。

さて、来年の大会は佐賀県でお引き受けをさせていただきますが、今年の鹿児島県の大会のように素晴らしいものになるよう準備を進めてまいりたいと思います。佐賀県は九州の北西部に位置し、北は玄界灘、南は有明海に面しており、豊富な海の幸・山の幸に恵まれています。特に呼子のイカや佐賀牛、嬉野茶などが全国的にも有名です。また、九州は鹿児島県をはじめとする焼酎どころのイメージがあると思いますが、佐賀県は広大な佐賀平野を有する全国でも有数な米の産地で、日本酒の酒づくりが盛んに行われています。世界最大のワイン品評会の酒部門で最優秀賞を獲得し、世界一の日本酒になったこともある鍋島など、佐賀県の日本酒もぜひご堪能いただきたいと思います。さらに伊万里や有田など多くの陶磁器の産地としても有名で、素晴らしい陶磁器に身近に触れることができます。ぜひ佐賀県にお越しの際は、食や酒、器を通して、佐賀の魅力を五感で楽しんでいただければと思います。

スポーツ分野に目を向けますと、昨年、国民体育大会から国民スポーツ大会に生まれ変わった新しい大会「SAGA2024国スポ・全障スポ」を開催しました。佐賀県では、2018年から多くの県民がスポーツを「する、観る、育てる、支える、稼ぐ」とさまざまなスタイルで参画できる社会を目指す「SAGAスポーツピラミッド構想」を掲げており、この国スポ・全障スポを契機として、さらなるスポーツを通した人づくり、地域づくりを進めているところです。このたび、スポーツファシリティーズ大賞のスポーツ庁長官賞をいただきました「SAGAサンライズパーク」も来年の視察予定としてご案内したいと思っておりますので、皆さまぜひ来年は佐賀県にお越し下さいますよう、よろしくお願いいたします。

結びとなりますが、日本スポーツ施設協会のますますのご発展と会員の皆さま、有資格者の皆さまの今後のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、次回開催県のあいさつといたします。

本日は誠にありがとうございました。

令和7年6月13日（金）
施設視察

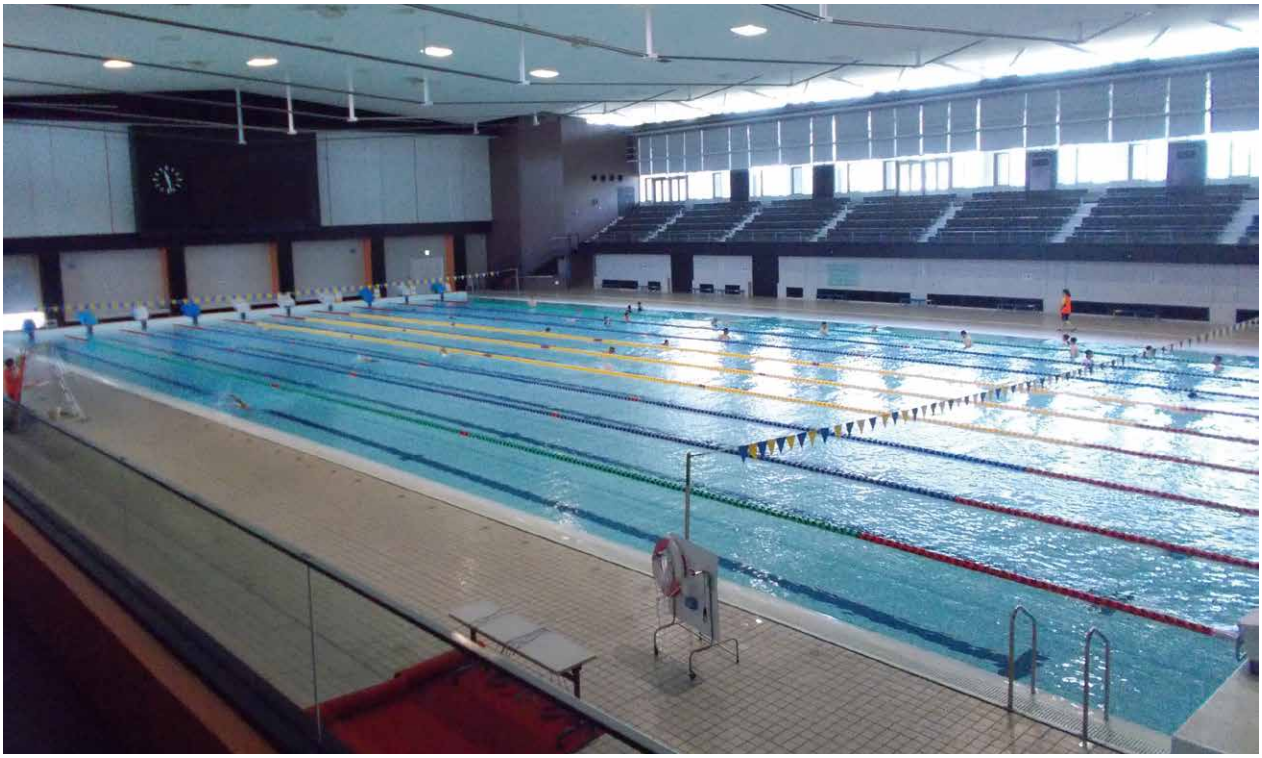
２日目は、ＡコースとＢコースに分かれて、Ａコースは南栄リース桜島アリーナ、湯之平展望所、鴨池公園水泳プール、Ｂコースはスポーツ・コンベンションセンター整備予定地、白波スタジアム、西原商会アリーナを視察した。

南栄リース桜島アリーナ（桜島総合体育館）

1986年に開館し、2023年「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」ではバレーボール会場として使用された。本館はバレーボール４面、バスケットボール２面、バドミントン12面などが配置可能な競技フロアと観覧席があり、各種スポーツ大会や文化的イベントにも利用されている。バレーボール２面、バドミントン６面が配置可能な補助体育館、トレーニング室、会議室も備え、市民の健康促進や競技力向上の場として広く活用されている。当日は中学生のバドミントン大会が行われており、応援の声と熱気に包まれていた。

湯之平展望所

桜島の北岳４合目の標高373ｍに位置し、桜島の展望所の中で最も高い所にあり、一般の人が立ち入りできる最高地点となっている。展望台からは、桜島の山頂や山肌を間近にみることができ、眼下に錦江湾と鹿児島市街地が広がる展望スポットである。



鴨池公園水泳プール

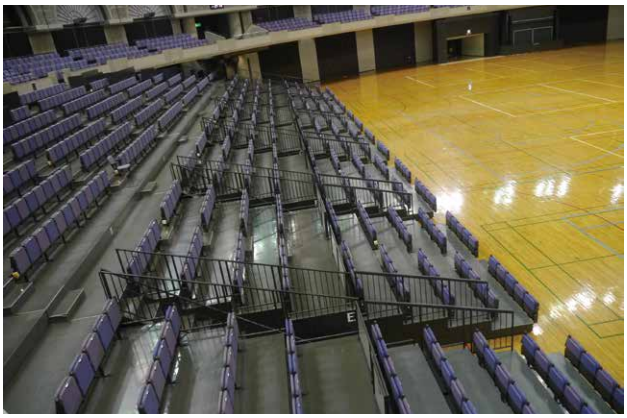
鹿児島市初のPFI事業として再整備が行われ、2011年にリニューアルオープン。2023年「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」では水泳会場として使用された。屋内50ｍメインプールは、国際公認の長辺50ｍ×10コース、短辺25ｍ×20コースが確保でき、可動床の採用により、水球やアーティスティックスイミングも対応可能で、観客席約2,000席を確保している。さらに、国際公認の屋外飛込プール、一般公認の屋内サブプールは25ｍ×８コースと幼児用プールを付設しており、大規模大会から一般利用まで幅広く利用されている。

スポーツ・コンベンションセンター整備予定地

前日の事例発表Ⅰで紹介されたスポーツ・コンベンションセンターの整備予定地を車窓から見学した。市街地と桜島を結ぶ鹿児島港フェリーターミナルに近く、最大の繁華街である天文館からも徒歩圏内にあり、利便性が高い場所となっている。

白波スタジアム（県立鴨池陸上競技場）

1972年「太陽国体」開催を機に整備され、2023年「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」に向けては、トラックの全面改修によりJAAF（日本陸連）第1種公認の更新とともにWA（世界陸連）クラス2の認証を取得、その他大規模改修が行われ、開閉会式および陸上競技の会場として使用された。約1万5,000人を収容し、各種陸上競技大会の開催やサッカーJ3・鹿児島ユナイテッドFCのホームスタジアムとして利用されている。

西原商会アリーナ（鹿児島アリーナ）

1992年に建設された多目的アリーナで、2023年「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」では体操（競技、新体操、トランポリン）、バレーボール（6人制）、柔道、卓球、サウンドテーブルテニスの会場として使用された。特徴的な円形のメインアリーナは床面積4,486㎡、移動観客席システムにより最大5,700名を収容、ほかサブアリーナ、武道場、弓道場、トレーニングルーム、スタジオなどを有している。竣工翌年の1993年に洪水に見舞われ、地下駐車場から1階にかけて浸水した経験から、現在も施設スタッフが毎年欠かさず災害対策訓練を行っている。